

『共に伝道する教会』

マタイの福音書 10:2~16

蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい。(16節)

序]

伝道とは何か。聖書の示すことに従うと、「伝道とは、キリストにいのちを頂いた者が、この世にあって、喜んで毎日を生きるライフスタイルだ」と言える。端的に言うと、伝道とは「やらされ仕事」ではなく、「クリスチャンのライフスタイル」である。イエス様は、福音を語ったというより、福音を生きたお方だった。元旦礼拝でも「キリストの福音にふさわしく生活しなさい」と語られた。福音を生活すること。それが伝道である。だとしたら、我々が自分たちが住んで生活している場所の近隣の人々が、伝道の対象であることがわかる。今朝はテキストから、主が示された伝道の戦略について学ぶ。(参考図書:「健康な教会のかぎ」リック・ウォレン)

本]

I 伝道の対象を絞る。(5,6)

主が弟子たちの働きをイスラエル人に絞らせた理由は何か。

- ①それは効果的に働くためだった。イスラエル以外の人々を排除するためでなかった。
- ②それは弟子たちがイスラエルに住む人間だったから。つまり、弟子たちにとって一番身近で、よく知っている人々の所に彼らを遣わすためだった。もし、全く知らない人々の所に行くならば、一からその土地のこと、人々の人柄を学ぶところから始めなければならなかった。

II 福音を受け入れやすい人々の所に行く。(14,23)

主は、福音に対して心閉ざしている人々に時間をかけてエネルギーを浪費するのではなく、福音を受け入れる心備えのある人々の所に行くように勧められたのである。これも、人を排除することが目的なのではない。要するに、青い実を採ろうとするのではなく、すでに熟している実のほうから収穫しなさいということである。

III 教会につながっていない人々のことを、なんとか理解する。(16)

「蛇のようにさとく」とは“未信者をよく知るために知恵を用いて”。「鳩のようにすなおで」とは“柔軟に未信者のことを知ろうと努力して”我らは傲慢にならず、彼らと接点を見つける。

IV 人々のニーズから始める。(8)

主は、人々のニーズを見出し、その人々に合わせた伝道をなされた。主は、未信者の悩みを捉える鋭さと、未信者のタイプによって伝道法を切り替える柔軟さを持っておられた。

結]

今年、我らは「共に伝道する教会」を目指す。最後に、我らが忘れてはならないことは、主は、どんな戦略にもまさって、未信者を愛しておられたということである。先週、「互いに愛し合うこと」こそが、世の人々への証と伝道につながることを学んだ。愛の器と変えてくださいと祈ろう。